

株式会社 川金ホールディングス



埼玉県川口市川口2-2-7
URL:www.kawakinhd.co.jp

社会を支え続ける技術を生みだす

創業から75年。社会の発展を担い、未来の安心をも見守る、川口発・世界レベルの技術があります。

株式会社川金ホールディングスは、埼玉県川口市に本社を置き、国内外18拠点にグループ各社があります。グループの事業は、産業用の部品や部材を作る「素形材事業」、免・制震装置で構造物を守る「土木建築機材事業」、ものづくりを支える技術を開発する「産業機械事業」の3本柱があり、総合力で産業と社会の基盤づくりを担っています。

代表取締役社長の鈴木信吉氏に、社会発展に密接な事業の歩みと地元への想いを伺いました。



代表取締役社長
鈴木 信吉 氏
Shinkichi Suzuki

鑄物の街、川口で創業 荒川との関わりも深く

昭和の高度経済成長期にヒットした映画『キューボラのある街』をご存じですか？あの物語の舞台が、埼玉県川口市です。キューボラとは、鑄物工場の溶解炉のこと。当時、その煙突が林立していた川口は、全国有数の鑄物産業が盛んな街でした。現在では鑄物工場の跡地などにマンションが建ち、東京への交通の便もよい快適な居住の街になっていますが、最盛期には700を超える鑄物工場がありました。

当社も戦後まだ間もない1948（昭和23）年に、川口金属工業株式会社として鑄造業を始めました。荒川の支流にあたる菖蒲川に面した工場が創業の地です。

川口で鑄物産業が発達した理由は、荒川で鑄物の原料に適した砂や粘土が採れたからとも、荒川の舟運が原料の調達や製品の出荷に便利だったからともいわれています。いずれに

しても荒川の恩恵を受けた立地に関係していると思います。

日本の経済成長を支え 変化するニーズにも対応

当社では鑄物のなかでも、橋梁の橋桁と橋脚を接合する、支承の製造に1958（昭和33）年から携わってきました。東京オリンピックに合わせて、首都高速道路や東海道新幹線が開通し、その後も日本の交通網の整備がどんどん進んだ時代です。アミの目のように河川が走る日本列島では、それをまたぐ橋梁の設置に多くの支承が必要とされ、鑄物製の支承を全国各地に納入しました。

そうした基盤となる事業があったので、昭和後期から平成にかけて、産業構造が徐々に変化し、製造業全般が縮小傾向をたどるなかでも、国内外の優れた技術を持った製造会社を積極的にグループ会社化し、事業の幅を広げて成長することができました。

1995（平成7）年の阪神・淡路大震災をきっかけに、支承に免・制震性能が求められる際には、グループ会社の総合力を生かして技術開発に取り組み、地震のエネルギーを吸収するゴム製の支承や、後付けの工事でも免震対策がしやすいダンパーを完成させて、社会インフラの強靱化に力を尽くしました。

メーカーの知見を生かした 点検事業も使命のひとつ

近年、日本では高度経済成長期に建設された、道路や橋など構造物の老朽化が進んでいます。事故を未然に防ぐためには、適切なサイクルで診断を行い、必要に応じてメンテナンスをしなければなりません。

当社は国内トップクラスの支承のシェアを持ち、過去の地震の際に記録してきた、支承の挙動データを保有しています。そうした数値も利用しながら、小型カメラを使った画像認識により点検ができるサービス事業を、産学官の皆様と協力し試験的に始めています。

人による点検の危険やコストは抑えながら、診断の精度を高めた遠隔管理で、持続的可能な社会インフラを支えていきたいと考えています。

地元愛をカタチに 荒川の治水にも貢献したい

川口で創業した当社は2023年で75周年を迎えました。社名変更を行った際にも、川口の川の字を残し、株式会社川金ホールディングスとしました。現在では、北は北海道、南は沖縄、米国、中国、ベトナム、タ

イなど国内外に18拠点を置くようになって、やはり川口の地で育てていただいたという感謝の念が強くあります。

工場が操業できているのも、近隣の方々のご理解があつてのことです。そのご恩をカタチにしようと、工場の半分を別地域に移設し、土地を更



川金コアテック茨城工場に設置されている国内最大級の大型二軸試験機 名称「3500TF」



下河東3号橋

地にして「ララガーデン川口」を誘致させていただきました。その際、荒川以南からも訪れやすいよう、菖蒲川に「かわきん橋」と名付けた橋を寄付しています。

また、川口市を本拠地とするサッカーのクラブチーム「アヴェントゥーラ川口」を応援しています。小中学生のサッカースクールに力を入れている団体なので、「ララガーデン川口」と協力し、屋上にフットサル場を設けさせていただきました。

この地域は荒川の堤防や流域管理のおかげで、創業以来、浸水の心配もなくやってきました。しかし、昨今の集中豪雨の多さには水害への備えも考えさせられます。私たちは事業を通し、自然災害への対応に長く取り組んで来ました。今後、気候変動により水害の危険性が増すことを見据え、技術でお役に立てることはないか考えていきたいと思っています。

例えば、日本ではまだ実績がありませんが海外からの要請で、水門の免震部材を開発したことがあります。そうした事例も生かしながら、荒川流域には何が必要なのか意見交換をさせていただき、地元の暮らし、荒川流域の安心に貢献ができればうれしく思います。